



ポムという男の子がいました。  
ポムは、ちょっとおくびょうもののしろくまです。





ある日ポムは、いつものさんぽみちを下をむいて  
とほとほ歩いていました。  
すると…



「わあっ」

大きなポムの足もとには、  
ちっちゃなアリがいたのです。



「ご、ごめんよ。アリちゃん。だいじょうぶかい？」  
「アリちゃんじゃないわ！わたしはチャムよ！  
あなたは？あなたしろくまさん？大きいわねー。  
それにあなた下ばっかむいて歩いてどうしたのよ？」

チャムのおしゃべりはとまりません。  
ポムはチャムのおしゃべりにびっくりしながら、  
「ぼくはポム。ぼく、こんなに体が大きいのに、すごく  
こわがりなんだ。  
だからみんなみたいにかっこよくなりたいとなかまにいれて  
もらえないんだ…。」



「あら。そうだ！いいこと思いついたわよ！  
わたしがボムをかっていいしろくまさんにしてあげる！  
トレーニングするのよ！ね！きまり！」  
「ほんと？みんなみたいにかっこよくなれたらなかまにもいれてもらえる！」  
「よし！あしたからトレーニングするわよ！」



こうしてポムとチャムのトレーニングは、はじまりました。  
「まずは、ふっきん10回よ！」



しかし…。



「次はマラソン！」



「はあ…。チャムは早いなあ…。」

ポムは、アリのチャムにも負けてしまいます。



「次はうたよ！」





何もうまくできないボムは、ちょっとおちこんでしまいました。  
「やっぱりぼくは、みんなみたいにかっこよくなれないんだ…。」

チャムはボムをはげまします。  
「だいじょうぶ！あしたもがんばるのよ！くしゅん」



ポムは、いつものさんぼみちをまた、下をむいて  
とぼとぼ家にかえりました。

その夜。

「あ、そうだ…。」

ポムはなにか思いついたようです。



次の日。

「おはよう、ポム。くしゅん」

「あ、そうだ。チャムに。はい。」

ポムは、チャムがくしゃみをしてさむそうに  
していたのを見て、チャムのためにちっちゃな  
チョッキをぬってあげていたのです。





チャムはポムをぎゅっとしました。

「ありがとう。

ふっきんできないし、

走るのおそいし、

うたもへたくそだけど、

こんなやさしいきもちをもってるポムが

せかいで1番かっこいいわ！」



今日もポムは、いつものさんぽみちを歩いています。  
上をむいて。  
ちょっとへたくそなうたをうたいながら。

おそろいのチョッキをきた、チャムといっしょにね。



